
初めから君はいなかった

立花慎菜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

初めから君はいなかった

【Nコード】

N9661F

【作者名】

立花慎菜

【あらすじ】

私はいつも欲しいモノは手に入れられなかった。家族、友達、恋愛。全てにおいて私は我慢を続けてた。いつか、きっと最高の幸せが訪れることを、信じて。

プロローグ

どうしてだろう。

どうして、いつも私が求めたモノは
消えてしまっただろう。

どうせ、消えてしまっただら

どうせ、失ってしまうのなら
何もいらない。

「ねえ！じゃあどうして私を愛したの！？」

「ごめん、、、でも、俺も確かに存在していたんだと覚えていてほ
しい。。。」

私が全力で愛した君は
全力で私を愛した君は

初めからいなかった…。

はじまり

自分で言うのもあれだけど、私は愛されなかった人間だと思う。

1991年、私は二卵性の双子としてこの世に誕生した。

初めて『愛されていない』と感じたのは、2000年。
私が小学三年生、つまり9歳の時だった。

小学三年生にもなると
姉の弥維やよいと妹の青維あおい。つまり私と弥維の違いがハッキリとしてきていた。

例えば父親似で男勝りな私と、母親似で日本の大和撫子みたいな弥維、のように。

そんなことも影響してか、私は、お父さんっ子だった。
高い高いをしてくれる父が本当に好きだった。

父も、なついてくる私を特別かわいがってくれた。

逆に弥維はお母さんっ子で、いつも優しく料理を教えてくれる母に
本当になついていた。

母も、わがままばかり言う私より

「ママ、ママ」と抱っこをせがむ弥維の方が可愛いみたいだった。

それでも、私たち家族は仲良しだった。

ある、事件が起きるまでは。

あの事件が起こったのは、夏休みが明ける三日前だった。

弥維は、もうとくに宿題を終わらせていて、母と二人でお菓子を作っていた。

「ねえ、ママ、パパが帰って来たら、一緒に食べようね!!」

「そうだね、弥維が一生懸命作ったんだから、パパも喜んでくれるよ!」

一人机の上で算数と戦っていた私は、台所が気になって5分置きに顔を出しては怒られて、勉強していた。

この時も、私はひよこつと顔を出して、二人に話しかけた。

「ねえ! 青維の分もある? 青維の分も作ってね!」

「青維ちゃん、算数は終わったの?」

「青ちゃんは、宿題が終わってないから、あげないよ!」

「え〜〜:」

私は、しぶしぶ部屋に戻ってもう一度算数とにらめっこした。

あと、5ページ。一時間もあれば算数は終わる。だけど、他にも読書感想文、漢字帳、朝顔の絵日記とやらなきやいけない宿題は山積みだった。

残りの宿題の量を確認して、落胆した。

ケーキが焼けるまで、たぶんあと30分くらい。だけど私は、まだ

まだ終わらない。これは本当にケーキはもらえそうにないみたいだ。30分して、スポンジケーキの美味しそうな香りが私の部屋まで漂ってきた。自然とお腹が鳴る。

私はまた、ひよこつと顔を出して台所を覗く。台所では、弥維がうれしそうに生クリームをケーキに塗っていて、母は苺の準備をしていた。

私の空腹は、もうピークに達していて算数なんか手につかなくなっ

た。そんな私を発見した弥維は、いたずらそうに笑って母を呼んだ。

「ママ〜！青ちゃんがまた来てるよ！」

「あっ！弥ちゃん、なんで黙っててくれないの？少しで良いから、その生クリーム頂戴！」

「だ〜め！」

「あ、青維、どうしたの？宿題、終わったの？」

「う〜〜〜〜まだ…」

「じゃあ、ケーキはお預け！」

涙が出そうになったのを、グッと堪えた。

父が帰って来たら、きつと「青維、ケーキないのか、パパのあげようね」って言うってくれる。

だから、父が帰ってくるのを必死で待っていた。

変化

だけど、その日は8時を過ぎても父は帰って来なかった。

「ねえママ、パパ、遅いねえ」

「そうだねえ折角弥維がケーキ作ったのにねえ？」

「うん：パパ、お仕事忙しいのかなあ」

「そうなのかもねえ：」

私は、その頃算数の宿題を終えて、読書感想文を書いていた。読書感想文の資料にしたのは、父に買ってもらった「あおぞら」という児童図書だった。「あおぞら」は、いつも雨ばかり降る国で、雨をやますために一人の女の子が冒険をするという小説だった。元々小説が大好きだった私は、読書感想文のために新しい本を読む必要がなく、意外と簡単に終わった。

だけど、漢字帳はなかなか終わらない。一つの漢字を10回書かなければならない漢字帳というものが無意味に思えて仕方がなかったからだ。

本が好きだけあって、私は同級生の中でも飛びぬけて漢字は読めたし、書けた。書ける漢字を何度も書く必要性が、どうしても理解できないから、飽きる。それにこの日はケーキの美味しそうな匂いがする。私の集中力は0に等しかった。

漢字を5種類、50回書いた時点で私の意識は完全にドアの向こうの弥維と母の会話に向いてしまっていた。父が帰ってこないらしい。不安そうな二人の声は、私の心も不安にさせる。

そんな時、母がドアをノックした。慌てて机に戻って勉強をしていたフリをする。

「青維、ちゃんとやってるのね。ほら、ご褒美にケーキ、持ってきてあげたわよ」

「本当!？」

私は母が持って来たケーキに気がいって、父が帰ってきていないことについては、スッカリ忘れてしまっていた。

母がくれたケーキは、苺は綺麗に乗っているものの生クリームが若干雑に塗られていて見た目が悪い。弥維は意外と雑なのだ。その辺りは父に似ていると思う。という私も、雑なので人のことは言えないのだが…。

「いただきまーす!!」

「召し上がれ。あら、青維、あと漢字と絵日記?」

「ふん(うん)！」

「絵日記は、弥維に見せてもらいなさい。漢字は頑張ってね!」

「ふぁーい(はーい)」

母は、優しい笑顔を私に向けて部屋を出て行った。その直後に、チャイムが鳴った。

ドアの向こうから、弥維の「パパだー!」という声が響いていた。

「パパ聞いて! 弥維ね、ケーキ作ったんだよ!」

「……………」

「あなた、もう少し褒めてあげてくださいよ!」

「パパあ?」

「……………」

父の様子が、変だった。それは、9歳の私にもハッキリと伝わっていた。私だけにではなく、弥維や母にも伝わっていたと思う。

この日から、父の帰りは日に日に遅くなり口数も減った。夫婦ケンカをする回数も明らかに増えた。父と母がケンカしている間、私と弥生は子供部屋で身を小さくしてケンカが終わるのを待つ。

「ねえ、最近パパ、どうしちゃったの？」

「わかんないよ…青ちゃん、パパと仲良しじゃん。話さないの？」

「うん…。青生が話しかけても無視するの。」

「辛いこと、あったのかなあ…。」

父の変化の原因は、1週間後に分かった。

離婚

昼間、父の忘れた携帯が家中に鳴り響いた。

最初は母も私も弥維も気に止めてはいなかったが、あまりにも何度もかかってくるので母が代わりに父の携帯の通話ボタンを押した。

「はい、悠斗^{ゆうと}の妻です。申し訳ありませんが、今悠斗は仕事で…」

母の言葉が途中で途切れた。顔色が一気に変わる。

私と弥維は「パパの名前って、ゆうとなの?」「そうだよ」などとお気楽な会話で盛り上がっていた。

「何…何言ってるんですか!!とにかく、悠斗はそんなことしません!」

母は、ハアハアと息を切らして携帯の電源をOFFにした。

私と弥維は流石に笑ってられない空気が流れているのを察知して黙りこくっていた。母はしばらくして私たちの方を向き直って笑った。

「いたずら電話みたい。ちょっと、パパのお洋服洗うから二人で遊んでてね。」

自然な笑顔だった。

あまりにも自然に笑うので、私も弥維も何事もなかったのだと勝手に解釈して二人でお飯事を始めた。

しばらくすると、父の部屋から母のすすり泣く声が聞こえた。その上、母の泣き声は次第に大きくなり、最後は叫びに変わっていた。

「ママ？」

私たちは、ゆっくりと父の部屋を覗いた。そこには、下を向き手首にカッターを当てる母がいた。弥維は、状況が理解できていないのか、呆然と口を開けて立っていた。私は慌てて母の手からカッターを奪い取った。

「ママ！どうして！？何があったの！？」

「……………う……………うわああああ！！！！」

母は、その場に泣き崩れた。カッターはまだ肌には触れておらず、母の腕に傷はなかった。状況を理解した弥維もワンワンと泣き始めて、私はただ一人冷静にその場に立ちすくんでいた。

夜になって父が帰ってくると、母は問い詰めた。子供の前だということも頭にはなかったようだった。

「どういうこと？」

「何がだ」

「今日、明美って人から電話がかかってきたわ」

「…明美？ああ、そいつは、新入社員だ。何を疑ってるんだ」

「子供ができたそうよ、あなたの」

「…！？」

「まさか、と思ったわ…。だけど、あなたのスーツに女の髪と香水の匂いがついてた…。たばこの匂いで消してたみたいだけど。」

「いたずらだろう、香水だって、偶然」

「写真。あなたの携帯の写真に、明美が写ってた。幸せそうね。」

「違うって言ってんだろう！」

その日、父が初めて母に手をあげた。母の頬が真っ赤に腫れあがる

ほど、強いビンタだった。母はまた泣き崩れて、父は黙ったままだった。

私は、今日の母の行動のことを父に言うべきか迷ったけど、言わなかった。何故言わなかったのか、私はわからない。

そして、翌日から父は帰って来なくなり、三日後に離婚届けだけがうちに届いた。

決別

父は、家族を捨てた。私と弥維と母を捨てた。
そして明美を選んだ。

父が家を出てから母は私を憎むようになった。弥維に比べて私の方が何倍も父に似ていたからだ。

母は分かっている。母だけでなく私も父に捨てられたんだという事を。憎くて悔しくて淋しくて切ない気持ちは母も私も、弥維だつて同じなのに：母は一人孤独を背負った。

父が家を出てから、母は部屋にこもるようになり私と弥維が交互に家事をこなすようになった。一言も文句を言わず、母の助けを続けた。まだ、9歳だったのに。

「ママ、ごはん出来たよ！」

弥維が呼びに行くと、母は少しだけ微笑んでご飯を食べる。だけど、私が呼びに行くと

「穢れた目で私を見ないで！」

と泣き叫んでモノを投げる。それでも私は、母を呼ぶ係を弥維だけに押しつけるような事はしなかった。ちゃんと毎回、交互に担当した。

見捨てたくなかった。父のように、母を見捨てたくはなかったからだ。

私はきつと、いつか母の傷も癒され、前みたいに笑ってくれる時が来

る。傷が癒されることはなくても、私が成長して父の面影を少しずつ消していったら、母が私を父と重ねることはなくなるかもしれない、と信じていた。

そんな生活を数年間続けていたら、急に仕事から帰って来た母が私たちを呼んで、話してくれた。

「ママ、再婚しようと思うの。」

初めは、母の再婚に心から喜んだ。父への憎しみや恨み、そして悲しみをふっ切るチャンスが母にも巡ってきたのだから。だけど、母の再婚の条件は最悪だった。

相手の人も、離婚経験があり子供が三人いるらしく、給料も少ない。単刀直入に言えば、私と弥維、それから相手の三人の子供を養うほどの余裕がなかったのだ。そこで出された条件は、私と弥維を養子に出す。という事だった。

この条件を最初に持ち出したのは相手の人ではなく母だった。母は、私たちを捨てたかった。父のすべての記憶を消すために、私たちを捨てたかったのだ…。

私と弥維を襲ったのは、絶望だった。今まで何があっても支え続けたのに。決して見捨てずに、母を支え続けたのに。

母は簡単に私たちを見捨てた。私は涙すら出なかった。笑いすら漏れた。溜息と笑いが一気に押し寄せて、胸に詰まる。言葉も、涙も、すべての感情が出てこなくなった。

隣にいた弥維は、ただ、泣いていた。

そんな私たちを見て、母は笑った。

「きっと、お互い別の人生を歩んだ方が幸せになれるわ」

父親に捨てられ、母親にまで捨てられた子供が、本当に幸せになれるのだろうか？ 私には分からなかった。分からないまま、捨てられた。

これは、私と弥維が小学六年生の時の出来事だった。

双子と他人

それからすぐに、私と弥維の引き取り先が決まった。

二人一緒に養子に入ることが難しかったため、私たちは別々の家へ行くことになってしまった。

でも、大人たちの配慮で少しでも近くにいられるようにと、同じ中学校へ通わせてくれるように手配してくれた。おかげで、お互いの新しい家は徒歩10分もかからない程度の距離にあったし、今までの家とは800K m以上離れていた。これで、もう私たちの事情を知っている人はいなくなる。

「青ちゃん、私、一人で行きたくないよ。」

弥維が、私だけにコッソリ教えてくれた。

次の弥維の家には男の子が二人いる。それも、同じ年の男の子二人だ。

それが嫌だったらしい。

父親の一件以来、弥維は極度の男嫌いになっていたからだ。

「変えてもらおうか？ 私の家には、誰もいないみたいだから…。お願いしてみるよ！」

「い…いいよ…。これ以上、迷惑かけれないもん。」

「でも…。」

「いい。我慢するよ。9歳のときから沢山我慢してきた。これくら

い、へっちゃらだよ！」

弥維は、笑った。

ここ最近、弥維は笑うのがとてもうまくなっていた。

特に、悲しい時に無理に笑うのがうまくいった。そんな弥維に比べて私は、笑うのが下手だった。年を重ねるごとに作り笑顔が増える弥維と反比例して、私は笑顔を失っていつていた。

「分った。でも、なんかあったらすぐに教えて？」

「うん。ありがと、青維。」

私たちは、仲がよかった。お互いがお互いの空洞を埋めて生きてきた。きつと、お互いがいなかったら死んでいただろう。

そして、私は牧野家の。弥維は金田家の養子になった。

牧野夫妻は、とても良い人だった。これからの将来を考えた結果、私は牧野青維の名前を名乗り、履歴書や調査書には養子に出たことについて一切触れないことに決めた。

聞いた話では、金田夫妻も同じように決めたらしい。

そして、私たちが双子だという事実も隠すことに決めた。幸い、私たちは顔が似ていなかったたので隠すことは容易だろう。

それでも、今まで支え合って来た弥維と双子だという事実を消されてしまうのはやっぱりつらかった。

偽りの笑顔

養子に出てからは中学が同じとはいえ、私たちはまだ小学生で、小学校は別々だった。それでも、私と弥維は何度も会った。お互いの家からちょうど中間地点にある公園で毎日毎日会っていたのだ。何をするにも、どこへ行くにも、一緒だった。学校以外は。

「弥維、どう？金田さんの家…。」

「うん…。希斗君と亜希君あきって子がいてね。でも、お母さんとお父さんは良い人。」

「双子…なんだよね、その子たちも」

「うん。一卵性で、すごく良く似てて…。性格も、そっくり。」

「仲良くなれそう？」

「う…ん。どうだろう。気さくに話しかけてくれるけど…。牧野さんは、どう？」

「うん。良い人だよ。凄くよくしてくれてる。学校は、どう？」

「楽しいよ…。うん」

そう言う弥維の顔は曇っていて、どこかつらそうだった。なんとかしてあげられたらいいのだけど、私自身も新しい家になれるので必死だった。

それを弥維も分かっていたから、私には弱音は吐かなかったんだと思う。

「でも、早く同じ学校に通いたいよ、青維。」

お互いがお互いを心配する気持ちゆえ、私たちはどんどん本音で相談し合う回数が少なくなっていた。だけど、お互いが一番お互いの気持ちを理解しているというつながりだけは、決してなくなることはなかった。

しばらくして、私たちは中学生になった。

クラス替えの結果、私と弥維は同じクラスになった。本来双子は同じクラスにはなれないのだが、戸籍上はもう双子ではないし、先生たちは事情を分かってくれて同じクラスにしてくれたみたいだ。履歴書を偽ることも了承してくれた。

たったそれだけのことだったが、私も弥維もだいぶ元気になった。学校へ行けば、弥維に会える。それだけが支えだった。だから、私は気付かなかった。弥維の変化に。今までは弥維の作り笑顔には必ず反応してきたはずなのに、一緒にいる時間が少なくなってしまうたせいか、もう私には弥維の笑顔がどれが本物なのか見分けることはできなくなっていたのだ。

一番辛い日

この日も、私と弥維は公園で二人きりで話をしていた。

「弥維、希斗君と亜希君とはどう？」

「うん？大丈夫だよ。二人とも根は良い子みたいで…。趣味が青維と似てるんだ」

「そうなの？まあ、私、どちらかと言えば男勝りだしね」

「うん。きつと、青維だったら仲良くなれたんじゃないかなあ」

「……弥維、やっぱり後悔してる？お互いの養子先を入れ変えなくて…」

「してないよ？青維、ちょっと元気になったみたいだし、これよかったんだよ。きつと。」

「私は良いけど…弥維は？弥維は大丈夫？」

弥維は、ふわっと笑ってブランコに駆け寄った。私は、弥維のカバンを持ってブランコの隣にあったタイヤの上に座った。

「大丈夫だよ！きつと、もうあの日よりも辛いことなんてないから」

「あの日って…パパがいなくなった日？ママが自殺しようとした日？ママに捨てられた日？」

「…………ママが、自殺しようとした日。」

意外だった。

私は、弥維なら大好きなママに捨てられた日を、一番つらい日にするだろうと思っていた。だけど、違った。

弥維は、自分の大好きなママが、自分がいなくなれば良いと心から願った日の方がずっと辛かったのだ。どこまでも、ママ想いの子供だったのだ。

「…………でも、ママ、今、幸せかな？」

「幸せだよ。だってママ、言ってたじゃない。私と青維がいない方が幸せだって。お互い別々の人生のが幸せになれるんだって。だから、ママは絶対、幸せだよ。幸せじゃなかったら許さない。絶対。」

どうして、弥維はこんなにも良い子なんだろうか。

自分を捨てたママを憎むどころか、心からママの幸せを願っている。ママやパパを憎んでいる私とは大違いだった。

私は、弥維の幸せを願いたい。その為に、私ができることは何なのだろうか。

「ママの幸せのためなんだもん、今の生活くらい全然大丈夫。それにね…思うんだあ。あのまま、ママがずっと不幸せな顔をして生きているのを見るより、幸せな顔は見れないけど確かにママが幸せなんだと信じる今の生活の方がきっと私にとってもいいんだって…。だから、私は大丈夫。」

「弥維…。」

「そんな心配そんな顔しないで！私は本当に大丈夫だから」

そう言った瞬間、弥維はブランコから飛び降りた。
そして綺麗に着地してその地点に印を付けていた。

「青維、見て！最高記録！」

そう、嬉しそうに自分が飛んだ距離を眺める弥維は、本当に現実に満足しているような、そんな顔をしていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9661f/>

初めから君はいなかった

2010年10月12日14時40分発行